

## 実践記録を読んで

青山陽子さんは、平成七年三月に本学教育学部国語科を卒業し、同年四月から美濃加茂市立古井小学校（全校児童数七五〇名ほど）に勤務。三年生、五年生をそれぞれ一年ずつ担任して、この三月で教職二年目を終わろうとしている。

「はじめに」のところで青山さんが述べているように、新採用教員の特に一年目は、体も心も休まる暇もない、まことに慌ただしい生活になる。学級経営も全教科にわたる指導も、その日その日の内容を少しでも充実させようと懸命に努力することで精一杯、ということである。

そういう無我夢中の日々が続く中で、幸いにも青山さんは、立ち止まって、それまで遮二無二やってきた自分の実践を振り返ってみる機会を持つことができた。そのきっかけは、実践記録の結びからも推測されるが、青山さんの勤務校のなかまの先生、あるいは新採

教員研修会での指導の先生がつくってくれたのであろうが、何よりも、青山さん自身の、担任する子どもたちをもっとよく育てていきたい、そのために自分はどうしたらよいか、という熱い思いであったと考えられる。

「問題とは、そこにあるものではなく、視点を設定した時はじめて出てくるものなのである。」（鈴木孝夫『ことばと文化』）ということばのように、青山さんは、立ち止まり、振り返ったときに見えてきたものの中から、子どもたちの「聞く・話す」という言語活動に注目した。—— 学校生活の中で、大きな割合を占める「聞く・話す」活動。それによって子どもたちが思考し、想像し、そして学習に参加し、生活を進めていく「聞く・話す」活動。それであるのに、あまりにも日常的でいわば空気のような存在にしか感じられなくなつて、国語科の中でも「読む指導、書く指導」に比べて軽視さ

高橋 弘

れがちな「聞く・話す」指導。そして何よりも、この問題を見つめていく上で、学級経営と国語科指導とを一体的に捉えていくことができる「聞く・話す」指導。――青山さんの気持ちの中にはこうしたいのあったことが、実践記録に述べてあることばの端々から推測することができる。

以下、青山さんの実践記録について幾つか感想を述べたい。

(一) 研究課題を設定して、改めて子どもたちの実態を見つめると、特に意識的に取り上げて指導していかなければならない問題が幾つも浮かび上がってくる。実践記録には「……不十分な児童が多かった」「……姿が大変多かった」「……話を聞かない児童もいた」など、概括的表現がされているが、学級全体の問題だけではなく、おそらく青山さんの手元の記録を通して、個人個人の問題も見えてきているに違いない。「子ども一人一人に」を言うとき、概括的表現の裏に、指導者の「子ども一人一人の具体」の確かな把握がある、ということは極めて大切なことである。

また、「児童の実態」の項最後の段落に述べられていることは、「聞く・話す」指導を単に技能的観点から捉えるというのではなく、子どもたちに人間的生き方として捉えさせていこうとする青山さんの姿勢を表しており、これまた、極めて大切なこ

とである。

(二) 次の「聞く・話す指導の意味」は、青山さん自身の考え方を述べた部分である。聞く、話すという言葉活動は、いつの場合も人と人のかかわりの中で成立するものであり、その基本をしっかりと踏まえて、教科指導、学級経営の両面から述べていることも、十分納得できるところである。

(三) 「年間を通しての目指す姿」は、学習指導法の上から重要な観点である。「学習についての見通しを持つ」ということは、これまでの学習を確かめ、これからの学習を見通す中で、現在の学習を考える、ということである。そして、その学年での到達点を見つめて、一段一段のステップを踏んで、上って行くということである。例えば青山さんが最初に担任した三年生は、これまで一年生、二年生と、「聞く・話す」指導を受けてきたはずの子どもたちである。本来は、一年生ではこれだけのことをきちんと指導しておきましょう、二年生はその上にこれだけのことを新たに加えて、確実に指導して三年生に引き継ぎましょうとなるのであるが、これは、全校的な見通しと了解の上に成り立つことであって、現状においてはなかなか難しいことである。例えば、人の話を聞く時に、「手なぶりをしない」「背筋を伸ばす」などは、もちろんできていなければ、その都度指導

はするにしても、低学年での指導が徹底していれば、学級全体の目標の一つにしなければならぬほどの内容ではないはずである。

そうは言っても、現実には大切な事が指導され、徹底されていなければ、その実態に基づいて、最初の方からの指導を始めなければならぬ。五年生のところで青山さんが、「三年生の聞き方・話し方のステップを前期に指導し……」としたのは、まさに賢明なやり方であったと言えよう。

青山さんは、「聞き方」、「聞き方・発言」と二つについてのステップを作っている。この作り方については説明されていないが、おそらく最初は、子どもと話し合って一つか二つの項目、そこへ一つ加わり、さらにまた一つ加わりというようになっていったのではないかと思われる。

目あて（この場合はステップ）づくり子どもを参画させていくことは、子どもの自覚、学習への意欲、態度、学習方法などの面で大切なことであり、その達成感、そして自信などの上からも重要なことである。また、自分たちで作ったステップは、「はじめに」の項にあった実践と同じく、学級の大きな文化的財産ということにもなる。

ステップの項目に、学級のなかまの名前がはいっていること

にも注目したい。これは、学級が解放されており、子どもがお互いに理解し合い、認め合い、力を合わせて伸びていこう、という心の結び付きができている状況が前提になるが、その項目に向けての具体的な姿があることは、例えば「大きな声で、はっきり、気持ちのよい返事をしましょう」と説明するよりは、「〇〇くんの返事のように」とした方が、子どもには実感できる。なかまのよさに学ぼう、という点でもよさが認められる。

(四) 「実践」の項目に挙げられた録音テープを使っている指導は、聞く・話す場合は音声言語であることから考えて、どうしても必要なことになる。次に挙げられた「音読」の指導についても同じことが言える。これまでの国語科の指導が、文章の読み取りを中心に、教科書とノートを使っている授業に偏っていたことが、音声言語の指導、そのために必要な録音テープの利用などを不十分なものにしてきたと言えるであろう。施設設備や経費の問題があるだろうが、「テープはノートと同じ」の立場で、学校全体の問題として考えていかねばならぬことであろう。青山さんの積極的な取り組みが評価できる。

(五) チェックカードを使っている指導も、いろいろ工夫がされていっておもしろい。そして、これを利用しての実践の反省として挙げられている二つの点も、青山さんの捉え方の確かさがあると感心

した。一つは、反省を記入する時間の少なさの問題と、もう一つは自己評価なので正確な反省になっていないという問題である。前者については、特に五年生の「発言力を高めよう」の表から感じたことだが、評価項目を一度に十五項目は、やっぱり子どもに負担感を与えるし、丁寧に思い起こしていれば時間もかかる。これはぜひ、最初から十五いっぺんにではなくて、その週なり月なりの目あてに照らし、数を少なくし、それもその目あてに応じて項目を削ったり、新たに加えたりしていくようにしてはどうだろうかと思う。また後者については、項目だけでなく、○△×を評価する尺度のようなものを子どもと話し合ってみると、幾分手がかりになるのではないかと思う。いずれにしても、チェックカードを使うことは、反省もさることながら、それを次にどう生かすかということに力点を置く必要がある。子どもが、その日の○×を付け、コメントを書くだけでなく、前日、前々日……の自己評価と比べながら、明日の自分の目あてを考え、努力する、そこにチェックカードの意味を見出していきたい。

(六) 物語文の指導において、よく話し合いによる内容の読み深めの指導が行われる。その様子を見てみると、発表に際して子どもは、自分の読みをノートやプリントに書き出したのを、その

まま読んでいることが多い。聞く方も、次自分が発表することに気が取られて、発表の内容を十分聞いていない現状がある。青山さんはそのことを、「書いてまとめることと、話し言葉でまとめることとは違う」と考え、ペア学習、グループ学習によって話す内容を話し言葉でまとめる指導を実践している。

書いたものを読むというのは、一見して話しているように見えるけれど、それは話すのではなくて読むのである。ノートやプリントの紙面を見ているのと、聞き手の表情、反応を見ているのとは明らかに違っている。青山さんがこのように「話す」ことの本質をつかんで、子どもの様子を注意深くみているからこそ、意味のある対策を考え、実践することができたのである。子どもの読み取りの内容に埋没してしまわないでいるところは、とても新採教員とは思えない確かさがある。

(七) 「はじめに」の項で述べられていた「一秒が一年を壊す」の国語授業の中での「地球子ども環境会議」から、学習交流会での「森林破壊」をテーマにした創作劇の全校発表に至る指導については、学級経営の観点からもおもしろい内容である。国語科の学習指導の観点から考えてみても、ただ教材を読んで、内容を把握し、まとめるというこれまでの一般的な授業には見られない新鮮な魅力が感じられ、これからの国語科教育を考えて

いく一つの手がかりになるであろう。このことについての実践を、今回の「聞く・話す指導の実践」のような実践記録の形式で、ぜひまとめてもらいたいと思う。

以上思いつくままに感想を述べてみたが、最後に一言。聞くところによると、新採用教員研修会一か年のまとめとして、青山さんは新採用教員を代表として研究授業を行ったようである。この実践記録を読んでみると、青山さんの新採用二年近くの教育実践の確かさとその充実ぶりを思わずにはいられない。また、本稿の最後で述べられている指導を受けた人たちへの感謝の心、そしてその指導を謙虚に聞いていこうとする構え、そしてそれらから自分なりのものを創り出していこうと考える、努力することなど、これこそ新採用教員の姿と感じさせられた。今後ますますのご精進を期待したい。

なお、あまり年齢的隔たりのない先輩のこの実践記録によって、教職を目ざす本学会学生会員が、よい指針を得、励ましを受けるであろうことも思い、併せて感謝したい。